

有關日語助詞「に」的幾個觀察點

薛 芸 如

元智大學應用外語系講師

中文摘要

日語的助詞大致上可分類為係助詞、格助詞、屬格助詞、副助詞與接續助詞等。助詞本身有其階層，其中助詞「に」又界於格助詞與副助詞之間。助詞若分為具有文法功能及帶有語義上的意涵來看的話，「に」應該在句法上的分類做進一步的釐清。

根據格位理論，名詞組出現在句子時應該獲得格位。而「に」和格助詞「が」・「を」有類似表示句法功能的特徵：如果是自動詞，首先出現的是格助詞「が」，其次是「に」；如果是他動詞，則優先順序是「が」・「を」・「に」。在次於句子的詞組結構中，我們發現「に」和「が」・「を」一樣不出現在名詞組內。此外在名詞與動詞要素所構成的複合動詞裡，「に」和「が」・「を」一樣允許併入現象產生。從較高層的句子到次一層的詞組到下一層的構詞，我們在不同的階層看到「に」和格助詞「が」・「を」有類似的特徵。本文雖未能提及助詞「に」在界定為格助詞時所需要之條件，但也藉此提出另一個待驗證的命題，即依動詞的次類畫分來驗證「に」和格助詞「が」・「を」是句法功能上的格助詞，可以依助詞的階層自動地衍生出來。

關鍵詞：階層、格助詞、副助詞、句法功能、併入現象

助詞「に」に関するいくつかの考察

薛 芸 如

元智大学応用外国語学科講師

要 旨

日本語の助詞は概ねに係助詞、格助詞、属格助詞、副助詞と接続助詞に分けられる。助詞はヒエラリキー (hierarchy) を成して、その中助詞「に」が格助詞と副助詞に跨っていることを察した。それをめぐって文法機能を果たす助詞、又は語彙的意味を担う助詞の何れに分類する方が適切なのかについて、いくつかの考察を行いたい。

格理論によれば、名詞句 (NP) が文に現れる場合、格を付与されなければならない。格付与のことを格表示といえば、主に二つに分けられる。文法関係を表すのに対して、意味役割を担っているのもある。即ち、構造上では文 (IP) が出来てから現れる文法機能を担う格助詞と、名詞句に意味役割を付与する副助詞のことがある。日本語は構造格を表すには「が」と「を」がある。助詞「に」は格助詞の「が」・「を」と同じ振る舞いが見られる。文構造においてはせめて必須項に準ずる項、自動詞なら「が」の次に現れ、他動詞なら「が」と「を」の次に現れる。句構造においては、「が」と「を」と同様に NP 内部に生起しない。また、語構造においては、「が」と「を」と同じく編入現象が起きる。副助詞に分類させる助詞「に」はどの下位分類にいれるべきか考え直す際に、それは動詞の分類とどういう関わりがあるかも課題として掘り下げていこ

うと思う。

キーワード： ヒエラリキー， 格助詞， 副助詞， 文法機能， 編入現象

Specification of Postposition ‘ni’

—analysis in terms of sentential, phrasal, and morphemic level—

Hsueh, Yun-Ju

Lecturer in Department of Foreign Languages and Applied Linguistics,
Yuan Ze University

Abstract

Postposition in Japanese has its subcategories functioning as topic marker, nominal case marker, accusative case marker, genitive marker and particles. Each of which constitutes a hierarchy and postposition ‘ni’ can be analyzed either as a case marker; i.e., dative marker, or a particle.

Noun phrases realized in sentences are assigned cases by postpositions. Description as follows shows some proves that in upper structure such as IP, ‘ni’ is preceded by default postposition ‘ga’ co-occurring with intransitive verbs while ‘ga’ and ‘wo’ co-occurring with transitive verbs. We also find the fact that ‘ni’, as well as ‘ga’ and ‘wo’, does not exist within noun phrase structure. As we dig into morphemic level, the N-V compound verb, NP realized by ‘ni’ in IP now shows some exhibits of incorporation as ‘ga’ and ‘wo’ do. Therefore we may postulate that ‘ni’ according to the subcategories of verb it co-occurs can be analyzed as case marker; i.e., dative marker, which automatically analogized in the order following ‘ga’ and ‘wo’. The postulation to prove valid shall be my next step.

Key Words: hierarchy, case marker, particle, grammatical function, incorporation

助詞「に」に関するいくつかの考察

薛 芸 如

元智大学応用外国語学科講師

1. はじめに

日本語の助詞は概ねに係助詞、格助詞、属格助詞、副助詞と接続助詞に分けられる^①。助詞はヒエラリキー (hierarchy) を成して、その中助詞「に」が格助詞と副助詞に跨っていることを察した。それをめぐって文法機能を果たす助詞、又は語彙的意味を担う助詞の何れに分類する方が適切なのかについて、いくつかの考察を行いたい。

格理論によれば、名詞句 (NP) が文に現れる場合、格を付与されなければならない。格付与のことを格表示といえ、主に二つに分けられる。文法関係を表すのに対して、意味役割を担っているものもある。即ち、構造上では文 (IP) が出来てから現れる文法機能を担う格助詞と、名詞句に意味役割を付与する副助詞のことがある。前者は、英語において文中の位置により、代名詞なら形態的変化が起きることによって明らかになるが、日本語は構造格を表すには「が」と「を」がある。また文構造に対照する名詞句の構造では「が」・「を」は「の」に転換することが出来る^②。

① 湯廷池 (1999) を参照。

② 長谷川 (1999) と湯 (1999) を参照。

- (1) a. 太郎が彼を殴った。
 b. John hit him.
- (2) a. 春が訪れる。
 b. 春の訪れ
- (3) a. 吉田先生が公園を散歩する。
 b. 吉田先生の公園の散歩^③

また、文法関係を表す助詞「が」・「を」と意味役割を担っている副助詞はそれぞれ違うレベルの構造に生起するといえよう。即ち文レベルにおける名詞と動詞の関係と句レベルにおける名詞と（前）後置詞との関係を示すものである。それは助詞「の」は係助詞と格助詞の前に起こり、副助詞や接続助詞の後ろに続くことから分かるものと思われる。

- (4) 君のは<係助詞>、僕のとちよつと違うようだ。
- (5) 君の（作品）が<主格助詞>僕の（作品）を<目的格助詞>しのいで一等賞を取ったよ。
- (6) 君から<副助詞>の手紙
- (7) 君と僕と<接続詞>の遣り取り^④

属格助詞「の」は文や節の名詞化（nominalization）に現れるから、(4)・(5)で示したように係助詞と格助詞は NP と共起し NP と成すことに対して、(6)・(7) のように副助詞や接続助詞は NP と共起し PP となすと示している^⑤。助詞は違う構造のレベルに生起することもそれで説明がつくことであろう。

文を述語の投射といえ、句（phrase）レベル・節（clause）レベルが含まれ、さ

③ もう一つの考えとして「散歩」の品詞は名詞に属し、「の」は名詞句内の構造格を表わすものである。

④ 上記の例は湯（1999）を参照。

⑤ NP、PP の分類は長谷川信子（1998）を参考。

らに文以上に展開していけば、文章 (text) と視られているものがある。助詞も次第に意味的な役割を果たすもの、文法機能を担うもの、そして文脈依存の場合機能を担うもの、それぞれの段階では適用されるものに分けられる。本文は節レベル、句レベルそして複合語の構造から助詞「に」の位置付けを考え直そうとする。

2. 節における文法機能を果たす助詞

節レベル (IP) における文法機能を果たす助詞は述語（ここでは便宜上で動詞をとりあげる）動詞の分類によって共起する現象は次の通りに表すことができる：自動詞と共起する「が」又は「が」・「に」、他動詞と共起する「が」・「を」か「が」・「を」・「に」である。自・他動詞を問わずに一般化してみれば、節レベルに現れてくる助詞はそれなりに階層^⑥を成していると言えないものでもないと思われる。即ち動詞の必要項、又はそれに準ずる（仮に準必要項と称す）ものであり、主格 (nominative) 標識は「が」で、目的格 (accusative) 標識は「を」で、対象格 (仮称) (dative) 標識は「に」で表す。

- (8) 私が毎朝六時に起きる。

起きる：[Ag が ____] v.i.

- (9) 私が毎朝学校に行く。

行く：[Ag が, Go に ____] v.i.

- (10) 私がリンゴを食べる。

食べる：[Ag が, Th を ____] v.t.

- (11) 私が田中君に本を渡した。

渡す：[Ag が, Th を, Go に ____] v.t.

⑥ 自動詞の場合は「が」<「に」；他動詞の場合は「が」<「を」<「に」

- (12) お兄さんにお年玉を預けた。

預ける : [Ag が, Th を, Go に ____] v.t.

- (13) a. この宝石をとってよく御覧なさい。

- b. この宝石を手にとってよく御覧なさい。

取る : [Ag が, Th を, Lo に ____] v.t.

- (14) 新しい商品が女の子に人気を呼んでいる。

呼ぶ : [Ag が, Th を, Lo に ____] v.t.

- (15) 会社三レポートを出す。

出す : [Ag が, Th を, (Go に) ____] v.t.

- (16) 母三電話をかける。⑦

かける : [Ag が, Th を, (Go に) ____] v.t.

また、名詞化現象から見れば、「が」・「を」から「の」へ、そして「に」から「へ」の転換 (conversion) が起き得る。

- (17) a. 君がほしいものを買ってきた。

- b. 君のほしいものを買ってきた。 (ガ→ノ)

- (18) a. ミーラを発見した探検隊が砂漠を渡った。

- b. ミーラの発見した探検隊が砂漠を渡った。 (ヲ→ノ)

- (19) a. [NP [IP 貴方に書いた]手紙]は今日届いた。

- b. [NP 貴方への手紙]は今日届いた。 (ニ→へ)

(17) ~ (19) の例によれば、名詞句を修飾する句は助詞「が」・「を」のみならず、「に」も強制的に現わすことが許されないことが視えよう。文法機能を表す格助詞「が」・「を」は IP 内部に存在する助詞と見なされれば、NP 内部に現れない「に」

⑦ これはセンテンスパターンにより決定される見方もできるが、本論は IP (便宜上文・節の何れにするが) は述語の投射からできていると仮定し、寧ろ動詞の分類により自主的に「に」が生起するという課題に基づき掘り下げていこうと思う。

も格助詞に属すると言えよう。

述語は形容名詞の場合、「が」・「を」は自ら階層が出来ていると覗える。

(20) あの男は美女 が／を 好きだ。

a. 美女を好きな男

b. a man who likes pretty women

(21) a. 美女が好きな男

b. a man whom pretty women like

b'. a man who likes pretty women

「好き」は「が」しか選択しないとき、(21) のように曖昧さが生じることに對し、
「が」・「を」選択すれば (20) のように一義的になる。

また三項動詞「教える」は文に 2 項しか現れない場合、「を」は直接目的語にも、
間接目的語にも付くことが許されるのに対して、「に」は間接目的語しか許されな
い。

(22) フランス人に日本語を教える。

(23) a. 日本語を教える。

b. フランス人を教える。

c. フランス人に教える。

(23) の例によれば「に」が現れる文は多義性が生じないことが分かる。即ち階層の
下へ掘り下げていけばいくほど意味はより明確になってくると言えよう。

文法機能を果たす助詞の「が」と「を」は受身表現や使役表現において昇格
(promotion) と降格 (demotion) ^⑧ の現象が起き、授受表現の「...てもらう」に
おいては「に」の生起が見られる。

⑧ Palmer p.16-18 を参照。

(24) a. 太郎が次郎を殴った。

b. 次郎が太郎に殴られた。（「を」→「が」に昇格、「が」→「に」に降格）

(25) a. 妹が掃除をした。

b. 母が妹に掃除をさせた。（「が」→「に」に降格）

(26) a. 彰が本を読む。

b. 彰に本を読んでもらう。（「が」→「に」に降格）

b'. 彰に本を読んでほしい。（「が」→「に」に降格）

上述したように名詞句内部に生起しないこと、必須項に準ずるもの、そして昇格・降格の現象から見ると「に」は‘七時に’のような任意項を除いて、格助詞と同じく振る舞い、IP 内部に生起する助詞だと言えれば差し支えなかろう。

3. 句における意味機能の助詞

句構造に適用される助詞といえば、決まった意味役割と共起するものが殆どであり、しかも語彙的意味を持つだけではなく翻訳上ではほぼ対訳できるものである。例えば、起点を表す「から」、移動の範囲を表す「まで」、方向を表す「へ」、comparative を表す「と」と道具・手段を表す「で」などがある。

(27) a. 彼女は遠くから手を振りながら走ってきた。

b. She ran from afar waving her hand.

c. 她從老遠的地方一路招手跑過來。

(28) a. 九時まで仕事をしていた。

b. I have been working till 9 o'clock.

c. 我一直工作到9 点鐘。

(29) a. 隊が西の方へ進んでいった。

- b. The troupe marched toward west.
 - c. 軍隊往西边的方向行進。
- (30) a. 花子さんとと映画に行く。
- b. I will go seeing a movie with Mary.
 - c. 我要和小華去看電影。
- (31) a. バスで学校へ行く。
- b. I go to school by bus.
 - c. 我搭公共汽車到学校。

またこういう類の助詞は節の名詞化 (nominalization) において属格標識「の」と共起できる。

- (32) a. [IP 先生から手紙が来た]。
- b. [IP これは[NP 先生からの手紙]だ]。
- (33) a. [IP 台北まで乗車賃はいくらですか]。
- b. [IP [NP 台北までの乗車賃]は高い]。
- (34) a. [IP アメリカへ行く途中、彼に十年ぶりに再会した]。
- b. [IP[NP アメリカへの途中]、彼に十年ぶりに再会した]。
- (35) a. [IP 大統領と面会した]。
- b. [IP[NP 大統領との面会]は光栄に思った]。
- (36) a. [IP 一流レストランで食事した]。
- b. [IP[NP 一流レストランでの食事]は窮屈だった]。

属格助詞「の」は文や節の名詞化 (nominalization) に現れるから、(32) ~ (36) ように副助詞や接続助詞は NP と共起し PP となすと示している。上述した「に」が格助詞と共に名詞化の構造に生起しないことと異なり、副助詞は NP 内部に現れる助詞だと言えよう。

4. 語構造における編入現象 (incorporation)

複合動詞には名詞＋動詞の構造があり、それぞれ対応する動詞句があることが伺える。

(37) a. 椅子に腰をかけた。

b. 椅子に腰かけた。

(38) a. 数珠を爪で繰る。

b. 数珠を爪繰る。

一方、次の例に依れば複合動詞内部に起こる編入現象は「が」・「を」・「に」格に限っていることが分かる^⑨。

(39) a. 床柱に傷を付ける。

b. 人を傷付ける。

(40) a. 人に傷がつく。

b. 信用が傷付く。

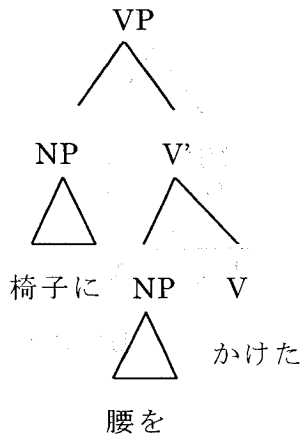
(41) a. 旅に立つ。

b. 新しい人生に旅立った。

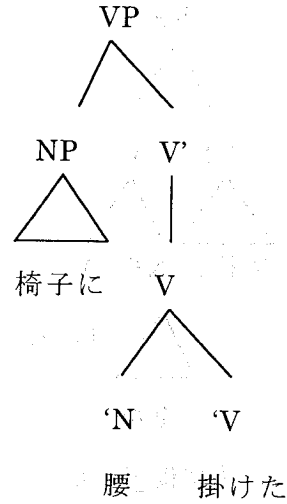
樹形図で比べれば、(37)・(38) と(39) ～ (41) の違いが明らかになる。

⑨ 以下の例は動詞句と複合動詞は意味上ではずれがあるが、ここでは構造的に対応しているところは注意されたい。

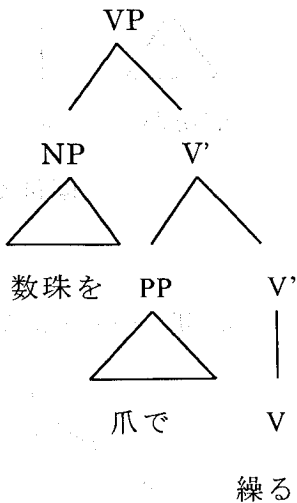
(37) a. 椅子に腰をかけた。



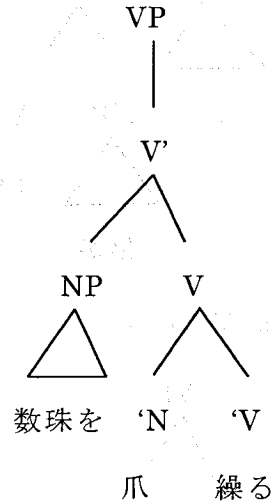
b. 椅子に腰掛けた。



(38) a. 数珠を爪で繰る。

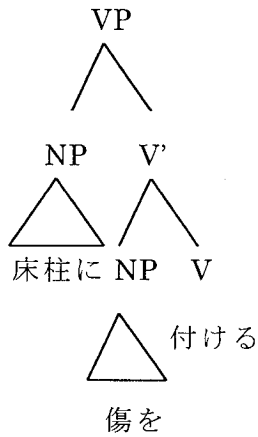


b. 数珠を爪繰る。

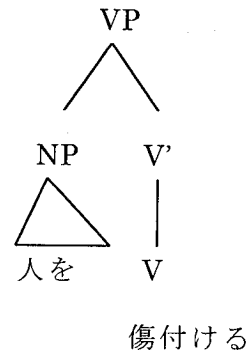


上記の樹形図を見れば、動詞の内項は複合動詞が取る内項でもあり、複合動詞による動詞句の構造は動詞そのものの構造とは変わらないことが分かる。

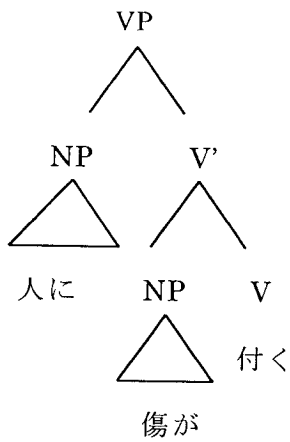
(39) a. 床柱に傷を付ける。



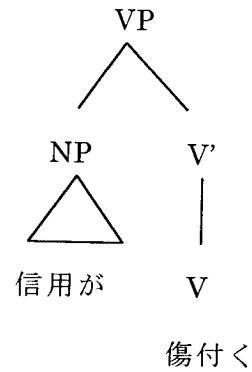
b. 人を傷付ける。



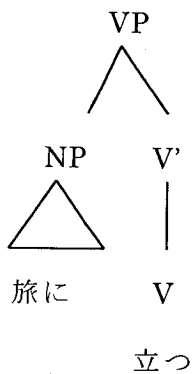
(40) a. 人に傷がつく。



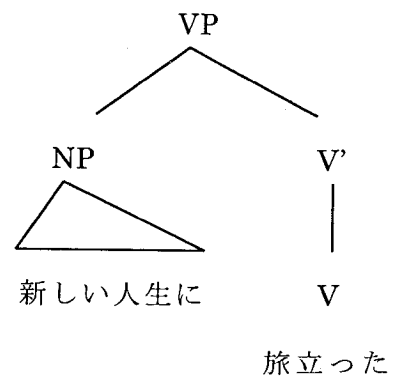
b. 信用が傷付く



(41) a. 旅に立つ。



b. 新しい人生に旅立った。



(39) ~ (41) で示されたように、動詞要素の項に当たる名詞要素は複合動詞の内部構造は取り込まれたにもかかわらず、複合動詞全体は同じ標識がついた項は取ることが出来る。即ち複合動詞において、「に」は「が」・「を」が付いた項は編入され、助詞「が」・「を」・「に」は複合動詞と共起する現象がある。

5. まとめ

格助詞に「が」・「を」が入るのは一般的である一方、文構造、句構造、及び複合動詞の編入現象からみれば、助詞「に」は格助詞の「が」・「を」と同じ振る舞いが見られる。文構造においてはせめて必須項に準ずる項、自動詞なら「が」の次に現れ、他動詞なら「が」と「を」の次に現れる。句構造においては、「が」と「を」と同様に NP 内部に生起しない。語構造においては、「が」と「を」と同じく編成現象が起きる。副助詞に分類させる助詞「に」はどのような下位分類にいれるべきか考え直す必要があると思い、それは動詞の分類とどういう関わりがあるかも課題として掘り下げていきたい。

参考文献

- 湯廷池 〈外国人のための日本語文法：日本語助詞の下位分類とハイアラーキー〉
《人文社会学報》Vol.1, No.2 元智大学 1999.7
- 薛芸如 〈日本語の複合動詞について〉東呉大学日本文化研究所修士論文 1991.1
- 長谷川信子 《生成日本語学入門》大修館書店 1999
- F. R. Palmer Grammatical Roles and Relations Cambridge University Press 1994